

夕顔の扇 ―能『夕顔』と『源氏物語』の相違―

同志社大学文学部教授

岩坪 健

一、謡曲と『源氏物語』

謡曲『夕顔』は、『源氏物語』夕顔の巻に基づいて制作されている。それでは両者の内容は、すべて一致するかというと、必ずしもそうではない。これは『夕顔』に限らず、『源氏物語』を踏まえた他の謡曲にも当てはまることである。その不一致に昔の研究者も気づいていたが、それは謡曲の作者が勘違いしたからだと片づけられていた。しかしながら、単なる誤解ではないことが、昭和四十年代になって初めて明らかにされた。

謡曲に取り入れられた光源氏の話は、直接『源氏物語』から引用された、それまでは考えられていた。ところが、そうではなく、実は『源氏物語』のあらすじを記した梗概書（ダイジェスト版）が利用されていたのである。しかも中世（鎌倉・室町時代）に作成された梗概書は、『源氏物語』を忠実に抄出したとは限らず、たとえば『源氏物語』にない話や人物を追加している。そのような筋書きが謡曲に取り入れられた結果、『源氏物語』の筋立てと合わなくなってしまうたのである。

二、謡曲と『源氏物語』の梗概書

では、なぜ謡曲の作者は『源氏物語』そのものを使わな

かったのであろうか。中世において『源氏物語』五十四帖を全部揃えていたのは、朝廷や幕府など、ごく一部の上流階級だけである。現代ならば図書館で借りたり、書店で買ったりできる。しかし当時は所有者に頼んで貸してもらい、書写するしかない。そのためには『源氏物語』を所有する高貴な人との縁故、そして大量の紙・墨・筆を用意する経済力が必要になる。それはコネも金もない庶民には不可能であり、ゆえに『源氏物語』はまさに高嶺の花であった。

けれども室町時代になると、庶民の間にも連歌が流行して『源氏物語』の知識が求められるようになる。光源氏の話を知らないと、連歌はたしなめなくなった。そこで『源氏物語』を持ってない人々のために、梗概書が数多く作られるようになる。なかには『源氏物語』の内容から、かけ離れたものも現れたが、それに気づく人はいなかった。なぜなら『源氏物語』を読んだことがないので、追加・変更された話も、光源氏の物語と思いきってしまうからである。

三、夕顔の扇

それでは、具体的に例を示そう。謡曲『夕顔』の間狂言で、光源氏と夕顔の君との馴れ初めが語られる件がある。光源

氏が夕顔の花を所望すると、「端つまいたう焦こがいたる白しろき扇あふぎ」に花を載せてさし出された、とある。白い扇なのに、端だけ焦げたようになっていいる。これは扇に描かれた絵が変色しないように、扇を閉じたまま香炉に近づけてたきしめたからであろう。同じ話を踏まえた謡曲『半せむら部』にも、「白しろき扇の端いたう焦こがしたり」とある。

ところが『源氏物語』には、「白しろき扇のいたう焦こがしたる」とあるだけで、「端」という言葉は見あたらない。すなわち『源氏物語』では、扇全体が色変わりするほど、お香がたきしめられていたのである。現代人が読んでいる『源氏物語』は、紫式部よりも約二百年後に活躍した藤原定家が本文を定めて青い表紙を付けた、青表紙本『源氏物語』である。その本文は、定家以外の人が所持していた『源氏物語』とはかなり異なるが、この箇所に関しては同文である。

では、「端」という語句は、謡曲の作者が適当に付け加えたのか、というと、そうではない。鎌倉時代に編まれた『源氏物語』の注釈書である『光源氏物語抄』を見ると、「端つまいたく焦こがしたる扇」と書かれている。よってその言い回しは、謡曲『夕顔』『半部』が成立する前から存在していたことが分かる。

四、ほかの扇

『源氏物語』では、ほかの場面でも扇が登場するが、どの扇にも「端」という言葉は使われていない。しかしながら中世に作成された梗概書を見ると、ほかに二人の女君

(朧おぼろ月夜・源げん典ない侍のすけ)も「端焦こがしたる」扇を持つていたと記されている。そのほか、光源氏の未来を占った外国の博士は、光源氏に数々の贈り物をした。物語では具体的な説明はなされていないが、中世の梗概書では詳しく語られている。そのなかには、病のときに使うと回復する、という「端焦こがす扇」が含まれている。したがって端焦こがした扇は『源氏物語』には見られないが、中世の注釈書・梗概書では四例も見いだせるのである。

五、江戸時代における扇

近世(江戸時代)になると『源氏物語』は出版され、中世よりも多くの人々に親しまれるようになる。すると、『源氏物語』と一致しない話や人物を含む中世の書物は、荒唐無稽なものと思なされ、読まれなくなった。では、端焦こがした扇も忘れられたかというと、そうではない。近世に流行した俳諧(現在の俳句)を例に挙げよう。

「夕顔や あばら屋の昔 古雪せつちん隠」。この句に対して松尾芭蕉が、批評を述べている。そのなかに「五条あたり古き雪隠の香りも、端つまいたう焦こがせる扇の匂ひに消されて」という一節がある。この端焦こがした扇という表現は、謡曲の本文によると考えられる。近世になると中世の梗概書は顧みられなくなつたが、謡曲は謡い続けられ、俳諧などの近世文学にも大きな影響を与えたのである。

六、扇の色

今までに取り上げた扇の色は、時代を問わず、すべて白であった。白い扇は夏用で、夏に咲く夕顔の白い花に合う。また白色は、夕顔の君の衣装や住まいの簾の色にも使われていて、夕顔の巻の基調となる色彩である。その色は清楚ではあるが、むなしく、はかない印象を与え、突然亡くなる女君の運命をも暗示している。

このように大切な色であるのに、中世の梗概書のなかには赤い扇が登場する。「紅の扇」、あるいは「紅のいとど焦がれたる扇」に花を載せて、と書かれている。花の白と扇の紅とのコントラストが鮮やかである。

中世から近世にかけて描かれた絵を見ると、ほとんどは白い扇である。けれども、ごく少数ではあるが、紅色が混じった扇もある。それを手掛けた絵師は、「紅の扇」と記された梗概書を見たのであろうか。あるいは「白き扇のいたう焦がしたる」という物語本文を絵画化するにあたり、焦げた部分を赤色で表現したのかもしれない。

七、現代

今回は『源氏物語』だけ取り上げたが、『伊勢物語』や『古今和歌集』、『和漢朗詠集』などの平安時代の作品も、謡曲に引かれている。ただし、原典から直接引用されたのではなく、その梗概書や注釈書が利用されている。また、

その現象は謡曲だけではなく、中世文学全般にも及んでいることが、昭和四十年代から明らかにされた。

このように原典から離れて享受されるのは、中世に限ったことではなく、現代においても見られる。たとえば『源氏物語』は、今までに何度も映画化されているが、映画の内容は必ずしも『源氏物語』の世界を忠実に復元したものではない。けれども『源氏物語』を読んていなければ、物語との不一致に気づかない。どのように改変されても受け継がれるもの、それが古典の宿命なのかもしれない。



→江戸時代に出版された『源氏物語』の挿し絵(国立国会図書館蔵 源氏小鏡)

屋根や堀に、夕顔の花が咲いている。その花を扇に置いて、女性がさし出し、それを光源氏の家来が受け取る。光源氏は牛車の中にいる。